

2025年会優秀発表賞（富士電機賞）表彰報告

若手育成事業委員会

2025年 9月に行われた2025年会における研究成果発表の中から、優秀な発表を行った若手研究者・学生等に最優秀発表賞ならびに優秀発表賞（2025年富士電機賞）が授与されました。以下、報告します。

最優秀発表賞（3件）

① ポスドクおよび博士課程学生の部

糸井 風音（筑波大学）

受賞対象発表：「社会関係資本による気候変動緩和行動の促進可能性：私的・公共領域に着目して」

② 修士課程（博士課程前期を含む）学生の部

三原 千穂（静岡県立大学）

受賞対象発表：「循環型農業の実現に向けた光触媒窒素変換技術を用いた即効性バイオ液肥の開発」

③ 学部学生・高専生・高校生等の部

児島 未来（東京都市大学）

受賞対象発表：「環境行政における女性管理職のキャリア形成」

優秀発表賞（6件）

① ポスドクおよび博士課程学生の部

田川 瑛梨（横浜国立大学）

受賞対象発表：「シリコーンパッシブ法における評価可能物質の推定とリスクアセスメントへの適用」

絹川 グリボスタン（東京大学）

受賞対象発表：「熱中症リスクに対する暑熱対策ツールの利用実態とその影響因子」

② 修士課程（博士課程前期を含む）学生の部

塩谷 稀一郎（東京大学）

受賞対象発表：「地域の観光における気候変動に対する脆弱性の評価」

井藤 千聖（酪農学園大学）

受賞対象発表：「牛の消化液培養におけるカギケノリ添加のメタン削減効果」

③ 学部学生・高専生・高校生等の部

神崎 愛琉（熊本県立水俣高等学校）

受賞対象発表：「メチル水銀に対する認識調査及び正しく理解するための手法としての毛髪水銀濃度測定」

安原 芽生（愛媛大学）

受賞対象発表：「二枚貝の軟組織に適用可能なPFAS分析法の確立と瀬戸内海沿岸域のモニタリング調査」

〔賞の創設ならびに受賞者選考・表彰経過〕

年会優秀発表賞（富士電機賞）は、環境科学分野の発展とその将来を担う創意ある若手研究者・学生等を育成・奨励することを目的として2008年に創設され、今年で17年目を迎えました。この趣旨にご賛同いただいている富士電機株式会社様に毎年ご寄付をいただき、年会優秀発表賞（富士電機賞）として表彰状ならびに副賞の授与を行っています。

年会において発表を行うポスドクから高校生までの若手会員を対象に公募を行い、年会講演要旨集および当日のポスター発表について、年会に参加した正会員による投票を行ったうえで、若手育成事業委員会年会優秀発表賞選考委員らによる厳正なる選考審査を行い、受賞者を決定しました。

2025年度は、ポスドクおよび博士課程学生の部、修士課程（博士課程前期を含む）学生の部、学部学生・高専生・高校生等の部のそれぞれから最優秀発表賞1件が選ばれました。さらに、優秀発表賞に計6件が選ばれました。年会中に開かれた表彰式では、荒巻俊也会長から受賞者一人ひとりに表彰状と副賞が授与され、会場から大きな祝福の拍手が湧き上がりました。



〔最優秀発表賞〕

受賞者氏名：糸井 風音(筑波大学大学院システム工学研究群社会工学学位プログラム)

受賞対象発表：「社会関係資本による気候変動緩和行動の促進可能性：私的・公共領域に着目して」

発表掲載頁：環境科学会2025年会講演集、p. 95

発表要旨：

社会関係資本は、個人間および社会的ネットワークとそれらによって生じる互酬性と信頼性を指し、社会の効率性と結束力を高める。社会関係資本は、日本では環境配慮行動を促進する要因として議論されてきた。欧州では脱炭素政策の支持や促進にも寄与することが示されているが、日本における社会関係資本と気候変動に対する意識や行動との関係性は、十分に解明されていない。

本研究では、日本における社会関係資本と気候変動緩和行動の関係性を明らかにするため、日本国内の成人男女1,200名を対象にオンライン質問紙調査を実施した。気候変動緩和行動として、省エネやごみ削減など家庭や個人における「私的領域の行動」と、投票や政治参加による制度的な変化を促す「公共領域の行動」について行動頻度を尋ねた。独立変数として、Value-Belief-Norm 理論 (Stern, 2000, *J. Soc. Issues*) の項目に加えて、社会関係資本の「信頼」、「規範」、「ネットワーク」、「参加」の4つの要素について尋ね、行動を従属変数とする重回帰分析を行った。

分析の結果、私的領域の行動では、「参加」が一貫して正の予測因子であった。普段からの積極的な政治・市民活動への参加が、省エネ行動や持続可能な商品選択を促進することが示唆された。また「ネットワーク」は商品選択と気候変動に関する対話・学習と、「信頼」は商品選択と正の関係性にあった。これらは、日常的な消費や生活のなかの気候変動緩和行動が、他者との交流や社会的な信頼関係を通じて強化される可能性を示している。公共領域の行動では、「信頼」と「ネットワーク」がイベントへの参加、投票から寄付・請願などの政治行動に至るすべての行動と正に関連した。特に、「ネットワーク」が公共領域の行動を顕著に促進していることが認められた。身近な人とのつながりを保ち、他者や社会に信頼がある人ほど、気候変動に関する市民活動に積極的であり、政治行動に環境配慮的な意識を反映させる傾向があるといえる。一方で、「規範」はイベント参加や政治行動と負の関係性にあった。既存の社会ネットワーク内の規範意識は、むしろ公共領域での積極的な行動を抑制している可能性が示唆された。

以上の結果から、社会関係資本のうち、特に「信頼」「ネットワーク」「参加」は、日本における私的領域・公共領域双方の気候変動緩和行動を促進することが認められた。とりわけ、公共領域の行動では、VBN理論における個人的規範や個人の価値観、信念に加えて、社会関係資本が重要な役割を担っている。したがって、家族・友人などの身近なつながりの維持や、コミュニティへの参加を促進することが、気候変動対策における市民の行動を促進し、制度的な転換にも寄与する可能性がある。

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2025年会最優秀発表賞 (富士電機賞) をいただき、大変光栄に存じます。ご支援いただきました富士電機株式会社様、環境科学会関係者の方々に深く感謝いたします。また、ご審査いただきました方々、発表時に幅広い角度からご意見や議論をくださった皆様にも、厚くお礼申し上げます。

そして、いつもご指導いただいている甲斐田直子先生には、感謝してもしきることはできないとは理解しておりますが、この場をお借りして深く感謝を記したいと思います。修士課程で環境心理学分野の研究を始めてから、知識や研究能力の不足から甲斐田先生のため息を枯らす日々だったと思います。今回、このような賞をいただくに至ったのは、甲斐田先生の地道で辛抱強く、徹底的なご指導・ご鞭撻によるものと考えています。

本研究は、気候変動問題において社会関係資本がどのように寄与し得るのかを検証したものです。気候変動という地球規模の危機に対して、身近な人とのつながりや協働の維持・強化がその解決の鍵になるのではないかと、そして、なぜそのような効果が生じるのかという心理過程を解明するために、心理学的な観点から研究を進めています。年会では、同様の問題意識や着眼点を共有する研究に数多く触れることができ、大変心強く感じました。今後も、環境科学分野の発展への貢献と、研究を通じて持続可能な未来を実現するために、一層研究に励んでまいります。



糸井風音
(いといかざね)

筑波大学
理工情報生命学術院
社会工学学位プログラム

〔最優秀発表賞〕

受賞者氏名：三原 千穂（静岡県立大学 大学院薬食生命科学総合学府 環境科学専攻）

受賞対象発表：「循環型農業の実現に向けた光触媒窒素変換技術を用いた即効性バイオ液肥の開発」

発表掲載頁：環境科学会2025年会講演集、p. 149

発表要旨：

バイオ液肥は循環型社会の創生に資する技術として注目されており、近年の肥料の価格高騰に加え、農林水産省が策定した「みどりの食料システム戦略」における化学肥料の使用量を2030年までに20%、2050年までに30%低減するという目標に向けて、その利用が推進されている。一方、需要を超えたバイオ液肥は多大なコストやエネルギーをかけて処理されているのが現状であり、需要拡大のための工夫が必要とされている。その例として、追肥（葉面散布）、土壌を用いない植物工場や水耕栽培への応用などの用途拡大に向けて、バイオ液肥中のアンモニア態窒素を硝酸態窒素に効率的に変換する技術の開発が求められている。

現在、バイオ液肥中のアンモニア態窒素の硝化方法として、硝化細菌を用いた生物学的な手法が検討されているが、アンモニア態窒素濃度が高い場合、硝化反応が強く阻害されてしまうことが知られている。一方、光触媒を用いた物理化学的な硝化反応は、高濃度のアンモニア態窒素に対しても原理上有効であり、特に酸化チタン光触媒は、安価でハンドリングが容易であることから有望だと考えられる。しかし、バイオ液肥中のアンモニア態窒素の硝化に関する研究例はなく、反応メカニズムの解析やバイオ液肥中に含まれる夾雑物質の影響評価、プロセスの最適化など、実用化に向けた検討が必要とされている。

本研究では、酸化チタン光触媒を用いた物理化学的な硝化反応について反応速度論的に解析を行い、その有効性を実証した。

実験では、福岡県築上町の有機液肥製造施設から採取したバイオ液肥を試料とし、これに酸化チタンを添加した後、極大照射波長352 nmの紫外線ランプを用いて反応を開始した。バイオ液肥の希釈倍率（原液、10倍、100倍）を変化させることで、バイオ液肥中のマトリックスが光触媒硝化反応に及ぼす影響を評価した。硝化速度は、バイオ液肥の原液で 0.31 mM h^{-1} 、10倍希釈した場合で 0.14 mM h^{-1} 、100倍希釈した場合で 0.17 mM h^{-1} であった。硝化反応は、100倍希釈でわずかに、10倍希釈でより顕著に阻害された。一方、バイオ液肥の原液では、最も高い硝化速度が得られた。これは、原液のアンモニア態窒素濃度が高く、硝化反応が促進されたためと考えられる。アンモニア態窒素が高濃度の条件下では、紫外線遮蔽、光触媒表面への吸着阻害、ラジカルの捕捉といったマトリックス由来の阻害効果を上回る程度の反応促進が生じた可能性がある。

以上の結果より、バイオ液肥のような複雑なマトリックスであっても、酸化チタン光触媒が高い硝化性能を発揮できることが示唆され、酸化チタン光触媒を用いた硝化反応の有用性が明らかとなった。

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会 2025 年会 最優秀発表賞（富士電機賞）という、名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。研究発表の機会を提供して下さった環境科学会関係者様をはじめ、この賞をご支援していただいている富士電機株式会社様、研究発表の際に貴重なご助言をくださいました皆様に、厚く御礼申し上げます。

本研究では、バイオ液肥中のアンモニア態窒素を、酸化チタン光触媒を用いて硝酸態窒素へと変換する技術の開発に取り組みました。実験では、バイオ液肥の希釈倍率（バイオ液肥中マトリックスの影響）やpHの違いが反応速度に及ぼす影響を解析し、複雑なマトリックス中でも光触媒反応が高い硝化性能を発揮することを明らかにしました。特に、バイオ液肥の原液条件下で高い硝化速度が得られたことは、即効性バイオ液肥の創出に向けた大きな成果であると考えています。

環境科学会2025年会では、多くの先生方から実用化に向けた課題について、貴重なご助言・ご指摘をいただき、新しい視点や考え方を学ぶことができ、大変有意義な機会となりました。今回の受賞を励みに、いただいたご助言を活かして今後も努力していきたいと思っております。

最後になりましたが、本研究を進めるにあたり手厚いご指導を賜りました、静岡県立大学の牧野正和 教授、徳村雅弘 助教、九州大学の矢部光保 教授ならびにサポートしていただいた物性化学研究室のメンバーに心より感謝申し上げます。



三原千穂
(みはらちほ)
静岡県立大学
薬食生命科学総合学府
環境科学専攻

〔最優秀発表賞〕

受賞者氏名：児島 未来（東京都市大学 環境学部 環境経営システム学科）

受賞対象発表：「環境行政における女性管理職のキャリア形成」

発表掲載頁：環境科学会2025年会講演集、p.171

発表要旨：

2021年5月、OECDはジェンダー平等と環境問題が相互に強く影響しあうことを示す報告書を公表し、女性が環境問題の影響を不均衡に強く受けている実態を明らかにした。土地・水・エネルギー・交通の分野において、ジェンダーに配慮したアプローチを採用することで、持続可能で包摂的な経済発展と福祉の向上が促進されると提言している。また、社会的・文化的規範に基づく構造が、女性の環境分野における活動やリーダーシップ参画を制約している点も指摘された。世界経済フォーラムによる2025年ジェンダーギャップ指数では、日本は148か国中118位にとどまり、特に政治経済分野での遅れが課題とされている。国内では、都道府県別や地方公務員管理職といった枠組みでの女性の政治参画に関するデータは公開されているが、環境行政分野における女性の参画状況については、依然として情報が不足している。このような背景を踏まえ、本研究の目的を、日本の環境行政におけるジェンダーバランスを明らかにすること、そして環境行政に従事する女性がどのようにキャリアを形成しており、どのような課題を抱えているかを明らかにすること、とした。

本研究では、環境行政に従事している女性職員に対して、30分から1時間程度の半構造化インタビューによる質的調査を2025年5月～6月にかけて7件実施した。インタビュー内容は、①環境部局の基本情報、②これまでと今後のキャリア、③キャリアパスにおける男女差、④ロールモデル、⑤女性管理職の現状、⑥働くうえで感じている課題の6項目とした。

インタビューが所属している環境部局において、正規職員に占める女性の割合は平均して21.5%であり、そのうち管理職に占める女性の割合は平均して11.5%であった。インタビューを通して、女性職員自身も女性管理職の数が少ないと感じていること、環境行政においてあからさまな男女差や男性の優遇は無いが構造的な昇任への壁があることが分かった。一方で、これからも仕事を続けたいと考えている女性職員が多いことも分かったため、今後は仕事に対するモチベーションや仕事に何を求めているのかを深く掘り下げていく。

受賞者からの一言：

この度は環境科学会2025年会最優秀発表賞（富士電機賞）という荣誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。指導教員である兵法先生と森先生、そしてインタビューにご協力いただきました行政職員の方々に心より御礼申し上げます。

環境とは多角的な視点で眼差してこそ理解が深まるものであると考えており、本研究はジェンダーという切り口から環境について読み解くことを試みました。研究を進めるうえで、自分が理解して落とし込めていることでも、他人に分かりやすく説明することがどれほど難しいかに気づき、また自分の直感的な理解を言語化することの重要性を思い知りました。学会への参加は今回が初めてでしたが、たくさんの研究を目の当たりにして多くの刺激を頂いたほか、研究内容をご覧くださった方から「面白い」「興味深い」といったお言葉を頂き、今後の研究活動への励みになりました。

ジェンダー主流化が推進されるようになった現在、様々な分野において多様な属性を持つ方々が活躍されています。環境分野においても、これまで以上に多様な方々が活躍し、持続可能な社会の構築とジェンダー平等の達成に向けた一歩が踏み出されることを願っています。

最後に、研究発表の機会をご提供くださった環境科学会の皆様、今回の賞をご用意くださった富士電機株式会社様に改めて深く感謝申し上げます。



児島未来
(こじまみらい)
東京都市大学
環境学部
環境経営システム
学科

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：田川 瑛梨（横浜国立大学大学院環境情報学府）

受賞対象発表：「シリコンパッシブ法における評価可能物質の推定とリスクアセスメントへの適用」

発表掲載頁：環境科学会2025年会講演集、p. 106

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2025年会優秀発表賞（富士電機賞）という荣誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。研究発表の機会をご提供いただきました環境科学会関係者の皆様、今回の賞をご用意いただきました富士電機株式会社様、また当日ポスター発表や口頭発表をご覧いただき、貴重な意見を賜りました皆様に、厚く御礼申し上げます。

本研究では、多様な準揮発性有機化合物（SVOCs）に対する個人曝露測定手法として注目されているシリコンパッシブ法について、評価可能なSVOCsの物性範囲の推定と、リスクアセスメントへの適用可能性の評価を行いました。普段は化学分析を中心に研究を行っておりますが、特に適用可能性の評価に際しては、定性的指標を入れ込む新たな手法を取り入れる必要があり、初めて行う解析に試行錯誤しました。今回の学会では、シリコンパッシブ法を実社会のどのような場面で活用していくべきかについて、環境に携わる多様な分野の専門家の方と議論する機会をいただき、新たな気づきや研究の方向性に関するヒントを得ることができました。今回の受賞を励みに、今後もより研究に一層精進してまいります。

最後に、本研究を進めるにあたり多大なるご指導を賜りました横浜国立大学の三宅祐一教授をはじめ、共同研究者である静岡県立大学の雨谷敬史教授、労働安全衛生総合研究所の王斉様、ならびに日頃よりサポートいただいている研究室の皆様に心より感謝申し上げます。



田川瑛梨
（たがわえり）
横浜国立大学大学院
環境情報学府

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：絹川 グリボスタン（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻）

受賞対象発表：「熱中症リスクに対する暑熱対策ツールの利用実態とその影響因子」

発表掲載頁：環境科学会2025年会講演集、p. 79

受賞者からの一言：

この度は、優秀発表賞という光栄な賞を賜り、心より御礼申し上げます。本学会の開催にあたりご尽力くださった運営関係者の皆様、ご協賛いただいた富士電機株式会社様、そして当日ポスター発表にお立ち寄りいただき、率直かつ貴重なご意見をくださった参加者の皆様に、改めて感謝申し上げます。

本研究は、暑熱軽減のための商品利用や情報発信ツールの活用実態を明らかにし、その背景要因を検討することを目的としています。研究の過程では、多様な地域や属性を含む大規模なデータを扱うことができ、そのおかげで幅広い傾向や特徴を捉えることができました。データ量が多いからこそ浮かび上がる関係性やパターンを抽出する作業は決して容易ではありませんでしたが、その分析を通じて得られた知見が今回の成果につながったと感じています。

学会当日は、暑熱対策や熱中症リスクへの適応に関心を持つ多くの方々と直接議論する機会を得ました。異なる分野の専門家からいただいたご指摘やアイディアは、自身の研究をより広い視点から捉え直す貴重なきっかけとなり、今後の研究を深める上で大きな励みとなりました。今回の受賞を糧に、これまで以上に研究を深化させ、社会の環境問題解決に少しでも貢献できるよう尽力してまいります。

最後に、日頃よりご指導を賜っている東京大学栗栖聖准教授をはじめ、福士謙介教授、都市サステイナビリティ学研究室の皆様のご指導とご助言に、心から感謝申し上げます。



絹川グリボスタン
（きぬがわぐりぼ
すたん）
東京大学大学院
工学系研究科

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：塩谷 稀一郎（東京大学大学院工学系研究科）

受賞対象発表：「地域の観光における気候変動に対する脆弱性の評価」

発表掲載頁：環境科学会2025年会講演集、p. 80

受賞者からの一言：

この度、環境科学会2025年会優秀発表賞(富士電機賞)を賜り、大変光栄に存じます。発表内容に関心を寄せてくださった多くの方々からのご質問やコメントは研究を続ける励みとなり、今後の取り組みに向けた刺激をいただく機会となりました。全国規模の学会での発表は緊張もありましたが、温かい雰囲気の中で研究を紹介できたことは大変貴重な経験でした。発表の機会を設けてくださった環境科学会の皆様、協賛の富士電機株式会社様、そして会場で耳を傾けてくださった皆様に心より感謝申し上げます。本研究では、地域の観光が気候の影響をどの程度受けやすいかを定量的に評価することを目的としています。雪不足や猛暑、豪雨災害など、地域ごとに直面するリスクは異なります。そこで、市町村単位で観光資源の構成や観光への依存度、関連する気候影響項目などを整理し、脆弱性を比較できる枠組みを構築しました。データの収集や指標づくりには多くの試行錯誤を伴いましたが、分析により地域ごとの特徴やリスク要因が可視化できたことは、適応策の検討に向けた重要な成果であると感じています。今後は、得られた評価結果を自治体や観光事業者との議論にもつなげ、地域の状況に応じた現実的な適応策の検討に広げていきたいと考えています。最後に、日頃よりご指導くださっている栗栖准教授、福士謙介教授をはじめ、都市工学専攻の先生方、研究室の皆様にも心より感謝申し上げます。



塩谷稀一郎
(しおやきいちろう)
東京大学大学院
工学系研究科

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：井藤 千聖（酪農学園大学大学院酪農学研究科）

受賞対象発表：「牛の消化液培養におけるカギケノリ添加のメタン削減効果」

発表掲載頁：環境科学会2025年会講演集、p. 67

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2025年会 優秀発表賞（富士電機賞）という栄えある賞を賜り、誠にありがとうございます。研究発表の機会をご提供くださいました環境科学会の関係者の皆様、富士電機株式会社の皆様、そして本研究に対して貴重なご意見を賜りました聴講者の皆様に、心より感謝申し上げます。

本研究は、地球温暖化対策として農業分野からの温室効果気体排出削減に貢献することを目指し、研究室全体で取り組んできた共同プロジェクトです。私自身もその一員として、乳用牛の消化液を用いた培養実験やガス分析を通じて、海藻カギケノリのメタン抑制効果の検証に携わってまいりました。研究を進める中で多くの試行錯誤を重ねましたが、特に、測定器具の調整が思うように行かず、満足する結果が得られない場面もありました。それでも、研究室内外の先生方からいただいた助言に支えられ、少しずつ課題を乗り越えることができたと考えております。

また、学会参加者の方々との意見交換を通じて、今後の研究の方向性について新たな視点を得られ、カギケノリの実用化に向けて、給与方法や保管条件、肉質・乳成分への影響、さらには農家への導入支援など、多角的な検討が必要であることを改めて認識することができました。この成果を一つの節目として、より実践的かつ社会に還元できる研究を展開してまいります。

最後になりますが、本研究は、吉田磨教授、泉賢一教授をはじめ、関係者の皆様のご尽力とご協力により成り立っております。ここに深く感謝申し上げます。



井藤千聖
(いとうちさと)
酪農学園大学
大学院酪農学研究科

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：神崎 愛琉（熊本県立水俣高等学校）

受賞対象発表：「メチル水銀の認知度調査及び毛髪水銀濃度測定による認知度向上への取り組み」

発表掲載頁：環境科学会2025年会講演集、p.158

受賞者からの一言：

この度は、環境科学会2024年会優秀発表賞（富士電機賞）という大変名誉ある賞をいただき誠にありがとうございます。この賞にご支援いただいている富士電機株式会社様、研究発表の機会をご提供くださいました環境科学会関係者様、また当日の発表の際にご質問、ご助言をくださいました聴講者の皆様に改めて厚く御礼申し上げます。

この研究の中で、私は水俣病について幼い頃から多くの学習を重ねてきた水俣高校生の水銀に対する理解度を調査しました。その結果、理解度はあまり高くなかったことが明らかとなり、実際に自分で加熱気化原子吸光法を用いた毛髪水銀濃度測定を行いました。その後、水俣市、横浜市、札幌市の3地域のデータと比較して改めてその結果を水俣高校生に向けて発表したところ、水俣高校生の水銀に関する理解度の向上に繋げる事ができ、適切なデータの公開を行うことで、今現在の水俣を発信することができると思えました。

環境科学会2025年会のポスター発表では、熱気に包まれた会場、他の参加者の皆様の素晴らしい発表に圧倒されましたが、この発表を通して聴講者の方々から助言や質問をいただくことで改めて自分たちの研究を見直し、更に研究を深めていく機会となり、大変貴重な経験をさせていただきました。最後に、今回の研究を進めるにあたり多大なるご指導を頂きました諸先生方、調査に協力してくださった皆様に心より感謝申し上げます。



神崎愛琉
(かみざきめぐる)
熊本県立水俣
高等学校

〔優秀発表賞〕

受賞者氏名：安原 芽生（愛媛大学 先端研究院 沿岸環境科学研究センター）

受賞対象発表：「二枚貝の軟組織に適用可能なPFAS分析法の確立と瀬戸内海沿岸域のモニタリング調査」

発表掲載頁：環境科学会2025年会講演集、p.161

受賞者からの一言：

この度は、優秀発表賞という名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。発表の機会を提供くださった環境科学会の関係者様、富士電機株式会社様、発表の際にご助言をくださいました皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、二枚貝の軟組織に適用可能な37種のペルフルオロアルキル化合物及びポリフルオロアルキル化合物（PFAS）の高精度分析法を確立し、瀬戸内海沿岸域の汚染実態と地理的分布を初めて明らかにしたものです。その結果、既に残留性有機汚染物質（POPs）として登録されているペルフルオロオクタンスルホン酸（PFOS）、ペルフルオロオクタン酸（PFOA）、ペルフルオロヘキサンスルホン酸（PFHxS）だけでなく数種の新興PFAS汚染が瀬戸内海沿岸に及んでいることが分かりました。そして汚染レベルは採取地点で異なり、地域特有の汚染源の存在が示唆されました。今後はより広域の瀬戸内海沿岸域における二枚貝中PFAS汚染モニタリングを展開する予定です。

今回の学会は私にとって初めての学会ということもあり緊張や不安が大きかったのですが、これまでの努力が形となり評価いただけたことを大変嬉しく思います。この気持ちを忘れずにこれからも一層の研鑽に励みたいと思います。最後にはなりましたが、本研究を進めるにあたり手厚いご指導をいただきました沿岸環境科学研究センターの国末達也教授、田上瑠美准教授、また、サポートしていただいた研究室のメンバーの方々に心より感謝申し上げます。



安原 芽生
(やすはら めばえ)
愛媛大学理学部